

# Nara Women's University Digital Information Repository

Title	万葉集巻一、巻二の成立について
Author(s)	橋本, 達雄
Citation	橋本達雄：若手研究者支援プログラム（三）（奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集 Vol. 20）pp.14-26, pp. 76-78
Issue Date	2008-07-31
Description	奈良女子大学21世紀COEプログラム（若手研究者支援プログラム）・（財）奈良県万葉文化振興財団・万葉古代学研究所共催 平成29年8月25日開催の「戦後万葉学の歩み」の講演内容と当日配布資料
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/3172">http://hdl.handle.net/10935/3172</a>
Textversion	publisher

This document is downloaded at: 2018-11-12T23:03:30Z

## 萬葉集卷一・卷二の成立について

専修大学名誉教授・橋本達雄

ただいまご紹介にあずかりました橋本でございます。たくさんの学部生の女性たちがお見えになっておられまして、阿蘇さんのように話がうまくできるといいのですけれども…。今日のお話は巻一と巻二の形成、あるいは配列というような、何か非常に堅苦しいもので文学的なことはあまり出てきません。面白くなかろうと思います。こういう会だということは知らなかったので、少し専門的なものになりますけれども、お聞きいただければと思います。本日は題目に掲げましたように、巻一と巻二がどのようにして今の形になったのかということをお話ししてみたいと思っております。

『万葉集』の巻一と巻二というこの二つの巻は『万葉集』の他の巻と違って、他に18巻ありますが、一、二だけ変わっているのは、各天皇の御代を標題に立てて整然と歌が時代順に並んでいることです。こうした巻は他にありません。天皇の代で括っていくというのはないのです。それで『万葉集』のなかでも最初に編まれた巻だというふうに考えられております。

しかし、現在の巻一と巻二を見ますと、のちに増補したもの、さらにそののちに追補したものの。追補とか増補という言い方は人によってニュアンスが違いますけれども、私は最初に補ったのを増補といい、そのあとでさらに補ったものを追補という言い方で使おうと思います。巻一と巻二を見ますと、他の巻もそうですけれども、そういう増補、追補というのが非常に顕著に指摘できます。その増補、追補というところを除いた部分を原万葉と呼んでおこうと思います。

巻一も、まず初めの部分ができまして、そのあとで増補されたものです。そのことはもう早く近世、江戸時代の末に橋守部という人がいっていることでして、まず巻一については、こんなふうになっています。本をお持ちになっていない方はちょっとわかりにくいでしょうけれども、「今案ずるにこの一の巻は、右の藤原宮の御井の歌までが旧の撰にして」という、「藤原宮の御井の歌」というのは53番の歌です。『万葉集』巻一は84番までありますが、53番までが元の撰、すなわち原万葉、そのあとが書き添え、すなわち増補だというふうになっているわけですね。題詞の形式がそれを境に変わってくる。大宝元年などという年号が入ってくるというようなものを根拠にいたしまして、ここで一応原万葉が終わって、あとは書き添え。さらにのちに追補された歌もあるというふうにもいっております。

この指摘は澤瀉久孝先生などにもそのまま受け継がれて、守部説をさらにいろいろな点から強固にいたしました。品田太吉という古い学者、それから徳田浄さんなど、並居る成立に関してものを述べた方はほとんどこの説を支持しております。阿蘇さんの本を読みますと、やはり阿蘇さんもそこで切っております。それから近年では有名な国文学者伊藤博さんです。自分で仮名を「はく」とふっておりますが、本当は「ひろし」だと思います。いつかこういったことがありました。「なぜ、「いとうはく」にしたのだ」と聞いたら、伊藤博という国文学者語

学者が3人もいるのです。中古の平安時代、中世で有名な学者で1人は東大、1人は教育大で、「原稿料が間違ってきた。それで“はく”にしたのだ」とおっしゃっていました。そんなことはどうでもよろしいのですが、万葉の成立のご本では立派な、非常に大きな仕事をなさった、戦後の万葉学の総仕上げのようなことをなさった伊藤さんもやはりこの区分を支持しております。

したがって御井の歌、53番までとそれより下を増補というふうに捉える見方は、概ね通説に近いといっているかと思えます。

しかしこれに対して異論もありまして、中西進さんというこれもまた大変有名な、私たちと同じ世代の方、昭和4年生まれの方ですが、中西進さんは原万葉はそこで終わりにしたのではなくて、軽皇子の安騎野の歌、すなわち45番から49番、「東野炎 立所見而（ひむかしののにかぎろひの たつみえて）」という歌が含まれる、そこで終わっていたといっています。それで巻二の相聞が、これは石見の歌という人麻呂の歌で終わっている。巻二の挽歌は、人麻呂が死ぬときといえますか、死に臨む歌という226番、挽歌はそこで終わっている。中西さんはそのようにいってございまして、挽歌のあと増補歌を除く最後がいずれも人麻呂で終わっていて、巻三が人麻呂から始まっている。「皇者 神二四座者（おほきみは かみにしませば）」という歌が巻三の冒頭です。そういうことを考え合わせると、巻一も人麻呂で終わるのがもっとも自然であるといひまして、続けてこのようにもいってございます。

「ここで私がいう原万葉が従來說かれたごとく成書であるならば」、要するに1冊の本であるならば、「どうして奇怪なまでに異様な題詞形をもつ作者未詳の、内容的にも、先立つ諸作と異なった役民の歌、御井の歌」というふうに、50番、51番、52番、53番と続く、「先立つ諸作と異なった歌でなぜ閉じられたのだろうか」といってございます。49番歌までが原万葉であったといっているわけです。私もまた役民の歌（50番）、そのつぎに志貴皇子の51番が入りまして、それから御井の歌（52番、53番）と続くわけですが、それはやはり増補だと考えます。その理由は中西さんもいってございますように、このような作者の記されていない歌は49番歌以前には一首もないわけです。作者のわかる歌だけを集めていると思われる原万葉に最初からあったとはどうも思えません。さらに二つの歌に挟まれた志貴皇子という有名な歌人の歌、これはだいたい増補に出てくる歌人です。中西さんの49番歌までが原万葉だという説を一応私もとるわけです。

ただ、中西説では題詞様式、何々のときに誰々がつくった歌という題詞が一つの基本だといっていて、それ以外の題詞は資料が別だとする観点から、49番歌以前でもその題詞に合わない歌を全部除きました。すると31首しか残らないのです。31首を拾い出してきました「これが原万葉だ」というふうにいっているわけです。しかし、この題詞様式というものは必ずしも特殊なものではありませんで万葉にはよくある形の題詞様式です。それから、わずか31首ばかりの本というのもどうだろうという疑問が森淳司さんという方から出されました。なるほどと思わせるところがございました。

こういう批判が中西説にはありまして、その中西説と森説の批判を踏まえて出されたのが松田好夫先生という方の説です。松田さんは、中西さんの49番歌までが原万葉だという説を生かしまして、それに森さんの批判を踏まえてどういったかということ、原万葉が巻二の挽歌を含んでいたならば、歌の少なさは解消できるといういまして、巻一と巻二の挽歌とが、元は一巻で原万葉だったというのです。では相聞はどうしたのだということですが、相聞は実は巻一の49番歌以前にもかなりある。だからこれはこれで残して、相聞だけは別の資料から増補して巻二ができたという言い方をしているわけです。

私の見解は松田説と同じではありませんけれども、原万葉は現在の巻二、それは相聞も挽歌も含んで一巻であったとする点では松田説に同調できていると思っております。現在の巻二についてはあとで申しますが、では現在の巻一の49番歌以前は全部原万葉にあった歌なのかと申しますと、お配りしたプリントをご覧ください。資料1に「原万葉」と縦書きしまして、1番歌から49番歌が現巻一雑歌だというふうに書いています。そして26追補は或本歌です。或本の歌が最初からあるわけではないのですから、これは増補か追補か。私は全部追補だと思っておりますが、これは除かれるということになります。

もう一ついっておきますと、或本歌というのは、実は49番歌よりあとの50番歌以降にも出てきます。50番歌以降は増補と最初に私は申しました。ですから、そのなかに「或本歌」とあるのは追補になるわけです。それで26は追補だと私は考えたのです。

それからもう一つ除けるのは、32番歌と33番歌を増補として除く理由はということかと申しますと、この歌の題詞はご覧になってわかりますように「高市古人近江の旧堵を感傷して作る歌」とあります。これはある本は黒人の歌だといっておりますが、この二首も原万葉にはなかったということです。これはどうしてかということ、人麻呂の「近江の荒れたる都をよぎるとき歌」と非常に題材が似ているものですから、その直後に増補されたものと思われる。原万葉編纂の時点で「黒人」を「古人」に誤ることはどうも考えにくい。それから歌の言葉で「古 人尔和礼有哉（いにしへのひとにわれあれや）」と「古人」と出てくるのですね。ここから誤ったにしてものちの人でしょうから、やはり増補であろうと。それから人麻呂の歌は「近江の荒都」とあるのにこちらは「旧堵」とあり、これもやはり違っております。同じ時点のものとはどうも考えられないということです。

このようにいたしまして、巻一における原万葉歌は巻頭から26、32、33を除く46首になる。これが巻一の原万葉ということです。

次に巻二について考えますと、橘守部は巻二についても227番歌、すなわち人麻呂の辞世の歌が並ぶところですが、227歌までは元の撰びで、ここまでが原万葉で、以下はまったくの書き入れであるといっております。伊藤さんもこの説を踏襲しております。

ところで、私は先ほど原万葉を現在の巻一と巻二から、のちに増補と追補と思われるものを除いた部分だといいました。しかし、巻一と巻二は別々に編纂されたと考える説が、由来が古く、そのほうがむしろ通説に近いといっております。それで、巻一と巻二は別々につ

くられたという別時編纂説に一応ふれておこうと思います。

巻一と巻二は、最初に申しましたようにともに各天皇の御代を標題に立てまして概ね時代順に並んでおりますが、この形はこの二巻以外になくて、作品の時代も重なるところが多く、部立も二巻で、雑歌、相聞、挽歌という万葉の基本的な三部立を揃えております。密接に関係することは間違いのないところでして、一見同時に編纂されたように見えます。しかし、すでに70年以上も前に品田太吉さんという方が「両巻（一卷と二巻）には相違点も多い。同時に撰定されたものではなくて撰者も別であった」という見解を示しまして、巻一は全部持統朝頃に書かれたものを基礎にしながら藤原宮の御井の歌までが原本であろうとし、先ほども御井の歌までとっておりましたね。皇室関係の歌を集めたもので、元朝廷が編纂したものであったのを、のちにそれを大伴家に譲り、大伴家に譲ったのちに相聞、挽歌の二つの部立を加えて、そのときに巻一に雑歌というふうに題したのだらうというのです。それは大伴旅人の頃で養老年間のことだらうとっておきます。

品田太吉さんの掲げる現巻一と巻二の相違点は数項目にわたっておりますので、あとでふれます。

こうした相違点を踏まえまして、先ほどから名前が出ている伊藤博さん、この方がいちばん編纂論ではすぐれたものをたくさん書いておられます。伊藤博さんは、両巻は要するに相違点があるから孤立してできたといって別途に編まれたと見られる、これは品田さんがいったことです。および橘守部とか澤瀉久孝先生が、巻一の原型は御井の歌で終わっていた、ここには構構性もある。というのは巻一の巻頭から二番目の舒明天皇の国見歌（国ボメ歌）、それから藤原宮の御井の歌、これは国ボメの歌なのです。すなわち一歌集としての構構性がある。これはもっとも早く文武天皇の頃、持統天皇が上皇時代というと697年から702年のあいだですが、その頃に成立したものだといって、その本を持統万葉、藤原宮本というふうにもいっているわけです。こういう言い方で巻一を捉えました。

それから両方は非常に似たところが多いと先ほど申しましたが、その共通点から持統万葉を継承して、巻二原形歌群が組み合わされ、同時に巻一の後半部（54～83）が増補されて83首本が生まれたのは、和銅5年（712）から元明女帝他界（養老5年〈721〉）までの間であったとし、これを元明万葉と呼び、持統万葉を継承してこれを拡大させ、完結させる人物として元明天皇ほどふさわしい人はいない。系図を書きますと簡単にわかります。天武・持統朝、これが持統万葉です。この一粒種の草壁は早くに亡くなりまして、この妃であった阿閉皇女（のちの元明天皇）、原万葉にも歌を残しておりますが、この方は持統天皇の腹違いの妹になります。しかも草壁の奥さんです。そういう関係で伊藤さんは、持統万葉を継承して拡大させ、完結させる人物として元明女帝ほどふさわしい人物はいないというわけです。結局、巻一と巻二は結論的にいうと元明万葉だということになりますね。こういうふうなわけです。

しかし、伊藤さんは続けてこういっております。少し読んでみます。「持統万葉を拡大させる云々というのにはわけがある。持統万葉は自らのあとに歌々が増補され、より大きく、より

完全な歌集が編まれることを初めから予期し、希望していたと見られるからである」というのです。続けて「持統万葉が編まれたとき、巻二の相聞や挽歌に収められた歌の大半は存在していた。にもかかわらずそれらは排除され、表立った宮廷生活に関する歌だけが選ばれて一巻がまとめられたということは、続いて巻二のような歌巻の編まれることを持統万葉が早々と意識していたことを物語っている。だから持統万葉にはなんの部立もなかったであろう。一種だけの歌巻に部立があったとは思われない。そして巻二が編まれたときに雑歌、相聞、挽歌の部立ができた」と、先ほどいったのと同じようなことですね。

「三部立は元明万葉の段階でつけられた」というときに、部立の問題は私もよろしいと思いますが、それではなにゆえに大半は存在していた歌が持統万葉から省かれてしまったのか。原万葉から排除されたのか。理由はどうもよくわからないのです。プライベートな相聞は別としても、挽歌には、皇子の死などを歌った表だった宮廷歌が多いわけです。その点では巻一の行幸に従ってつくった歌などに比べましても何ら遜色があるとは思われないわけです。これを排除する理由は、私はとくに見出せないと思います。

では、これをどう考えたらいいのかというと、先ほども述べましたように、伊藤さんのいう持統万葉は相聞も挽歌も含んで、天皇代順ごとに一巻として編まれたものではなかったか。私はそれが原万葉だったのではないかと思うわけです。それを、のちに増補した段階で、伊藤さんもうのように三部立を設け、二巻に仕立てたのだと考えます。そしてその際に品田さんのあげる巻一と巻二の相違点の大方は生じたのだと思われます。この点でいえば、原万葉を編んだ時や人と、巻二を立てた時や人とは異なっていますので、別時・別人の編纂であるともいえましよう。そこで品田さんのあげる、巻一と巻二の相違点の非常に顕著な場合を三つばかり挙げますと、まず、天皇の歌ですが巻一には必ず「御製歌」とあります。ところが巻二にはすべて「御歌」と書いてあります。それから巻二には「〇〇の歌何首」という歌の数が書いてあります。ところが巻一は題詞を見ても「〇〇の歌」とあるだけで何首とはありません。それから反歌の付いた長歌の題詞も、巻二には必ず「并せて短歌」というふうにあります。ところが巻一にはそれがありません。

これは、どういうことかと申しますと、1番目の天皇の歌については原万葉には公的な歌が非常に多かった。したがって重々しい中国風の「御製」という言葉を用いたのだと思います。が巻二の相聞の部立を立てるにあたって、「御製歌」ではいかにも堅苦しい、重々しい、それを相聞では和らげまして内容にふさわしく「御歌」と書いたのだと思います。挽歌には実は天皇の歌はないのです。増補部分にはありますがこれは増補資料によったものでしょう。このような違いがあります。2番目の歌数の場合は、歌数を記していなかった原万葉から切り出してきて、切り出した歌の首数を書いたというふうにと考えたらいいだろうと思います。「并わせて短歌」の場合も同じだろうと思います。

これらのことが主だった相違ですが、原万葉にそのまま追随しないで、よりふさわしく、より詳しく変えたところに編者の工夫と自己主張とがあったと見るべきだと思います。

そこで巻二、相聞、挽歌部の原万葉の範囲はどの部分なのかということが問題になります。まず相聞です。資料1と3によると、相聞は91から始まりますが、巻二の相聞は85番から始まっています。85番は「磐姫皇后が天皇を思ひて作りませる歌四首」という歌です。89番、90番、ここまでが磐姫関係歌ですが、この85から90までの6首は原万葉にはなかったと思われる。そのうち89番歌は87番歌の異伝である「居明而 君乎者将待（いあかして きみをばまたむ）」という或本歌です。これは「在管裳 君乎者将待（ありつつも きみをばまたむ）」です。それから90番歌は「君之行 氣長久成奴（きみがゆき けながくなりぬ）」という歌です。これはそっくり85番と同じという例です。85から88の歌よりあとで入れられた歌であることは明らかであります。85から88までの四首が増補されたのちに追補されたのだと思います。

磐姫皇后作と伝えるこの4首は緊密な連作を成しております。この成立時期については諸説がありますけれども、今は稲岡耕二さんのお説によりますと、85番歌の左注に「右一首の歌は山上憶良臣の『類聚歌林』に載っている」とありますのは、『類聚歌林』には85番しか載っていませんでした。あとの3首は何も載っていません。これはそのとおりだと思います。ですから、連作の成立時期は『類聚歌林』ができてからあとだという考えです。『類聚歌林』は、聖武天皇が即位する前に山上憶良が東宮侍講をしておりましたその頃につくったものだと思います。だいたい養老から神亀の頃、717年（養老元）から728年（神亀5）、このあたりにできたものだと推定できます。

もう一つ根拠を挙げているのは、「在管裳 君乎者将待 打靡 吾黒髪尔 霜乃置萬代日（ありつつも きみをばまたむ うちなびく わがくろかみに しものおくまでに）」とこの歌は、霜を白髪 of 比喩に使っております。これは先ほど出た山上憶良が初めて万葉では使っております。804番歌で憶良が使っています。この説がいちばん妥当だと思いますので、これらに従っておきたいと思います。そうだとすると、この歌群は原万葉を分解して巻二を立てたときに相聞の部を設けるにあたりまして、巻一の巻頭の雄略天皇に匹敵する女性として磐姫皇后を選んで、それにちなむ歌を巻頭にもってきたということを思わせます。

したがって、相聞部における原万葉は次の近江大津宮、91番以降になりますけれども、101、102は大伴の歌群なので、大伴の歌群は原万葉にはなかったということでこれらは省きます。それからもう少し後ろへいきますとまたずっと続きまして、どこまでかという113番歌までです。113番歌は「但馬皇女が高市皇子の宮にいますときに穂積皇子を思ひて作れる歌」です。ここまでだというその理由について述べます。

私は別に「万葉集の編纂と金村・赤人たち」という論文を書いたことがありまして、その原稿でどういうことをいっているのかということ、巻三、四、六、八、の編纂がどういう資料を用いてなされたかということ考えたことがありました。この四巻には共通の作者が非常に多い。共通の場の歌が巻によって分かれていたりしている巻なのです。巻五だけは特殊なので除きます。

これによるとこの四巻は、ここに書きましたが資料の6をご覧ください。「巻三、四、六、八の編纂資料とその編纂」というところです。「人麻呂時代にまとめられていたと思われる巻一と巻二の古い歌（原万葉）のあとに、笠金村・山部赤人たちが、原万葉に採り残された歌（拾遺歌群）を集め、それに自分たちや周辺の歌を採録した資料（金村・赤人歌群）を残しておいた。その後大伴家持を中心とする人々が、大伴家中心の資料（大伴歌群）を加えて、巻三、四、六、八の諸巻を編んだものと思われる（ただし巻六は「拾遺歌群」を含まない）。人麻呂時代の歌を含んでいないということです。「そして、これに先立ち」とここが大事なのですが、「金村らは拾遺歌群と金村・赤人歌群の資料を用いて、原万葉に増補し、原万葉を分解して三部立を設けて、現在の巻一、巻二の形に近いものとしたと考えられる」と、このようにいっているわけです。

これを要約しますと巻三、四、六、八の四巻は、拾遺歌群プラス金村・赤人歌群と大伴歌群との二つの大きな資料を用いて編纂したのだということです。そしてこの拾遺歌群プラス金村・赤人歌群の資料を用いて巻一と巻二の原万葉に増補したと思われるということです。要するに、原万葉に増補する際に用いた資料は拾遺歌群プラス金村・赤人歌群であったということになります。

例えば「巻三雑歌の配列」というところをご覧ください。7の資料です。A、B、C、Dと略して書いてあります。Aが拾遺歌群プラス金村・赤人歌群、B、Dが大伴歌群、Cが金村・赤人歌群というふうに非常に簡略に書いています。このあいだに増補歌などがありますからまた別になりますが、単純にいうとこういうことです。

巻三は人麻呂から始まります。人麻呂、持統天皇で始まりまして、これが拾遺歌群。それから門部王、通観が最後にきます。これが金村・赤人歌群です。そのあとにBの大伴歌群が入っております。Cにいきますと若湯座王、それから2番目に通観、最後は赤人で終わっております。通観というのはAの327に出て、それからCの353に出ます。この通観という人は『万葉集』ではこの2首しかない人です。その人が大伴歌群を抜くと続いてくるのです。そしてその末尾が赤人で結ばれています。

巻八の「夏雑歌の配列」はもっと単純です。藤原夫人というのは天武天皇のお妃で、次が志貴皇子、これは拾遺歌群です。刀理宣令、赤人、これが金村・赤人歌群です。また赤人で終わっています。bが大伴歌群ということになっています。

この三、四、六、八の部立は全部で11部立あるのですけれども、その部立の拾遺・金村歌群の終わりは、今、赤人は二つともありますけれどもまだ赤人があります。その他に金村が出てきます。さらに出てくるのは長屋王の息子の歌です。長屋王という人は、私の考えによれば金村や赤人を庇護した人だったということ。これはまたあとで申します。それから、冬の雑歌などは聖武天皇の歌が出てくるのですが、これはやはり長屋王の家でつくった歌が出てきます。一々書けばよろしいのでしょうけれども。とにかく11部立のうち7部立が金村・赤人、長屋王関係歌で閉じられているわけです。これはちょうど原万葉が人麻呂で閉じられていたことと



まさに対応する形であるわけです。

それで巻一の増補部を見てみますと、「現巻一雑歌」というところが資料の2に載っております。省いた歌が載っております。これは原万葉で1から49までのあいだにあるわけです。増補部に出てくる人たち、人物は21人おります。そのなかで『万葉集』内でここにしか出ない人が9人もいるのですね。それを除くと12人になりますが、今申しました巻三、四、六、八の拾遺・金村・赤人歌群に歌を残している人を調べましたら10人もいるわけです。12人のうち10人です。残る2人は置始東人と元明天皇、東人は巻二にも出てきますが、巻一にも増補部に出てきます。ですから12人中10人。11人といってもいいのですが、ほとんど重なるのですね。

巻二の相聞の増補部に登場する人物は、先ほど述べた磐姫と大伴歌群の歌を除きますと11人です。そのうち全部が巻三、四、六、八の、要するに拾遺歌群プラス金村・赤人歌群につながる人々です。人物がびったり重なるわけです。11人が全部重なる。巻二の相聞の増補部は、まさに拾遺歌群プラス金村・赤人歌群をもって増補したということがいえると思います。

続いて巻二の挽歌を見てみたいと思います。まず原万葉の範囲について申しますと、冒頭の有間皇子の結び松の歌、141からですが、いちばん上の段に載っております。それから201番というのが「高市皇子尊城上殯宮」の歌、そこまでだと私は考えています。

まず原万葉を201までで切る理由を述べます。増補部冒頭の202番の歌というのは「高市皇子挽歌」の或書の反歌です。先ほど或本というのは全部追補だと申しました。或書とは区別します。或書は私は増補だと思っております。次の203番歌は、但馬皇女が亡くなったときの挽歌です。これは巻二の相聞をその前で区切ったのと同じです。本のない方はわかりにくいと思いますが、その前の或書が202番です。「但馬皇女が亡くなった後、穂積皇子が雪の降る冬の日に遥かに御墓を望みて、悲しみ、涙を流して作りませる歌」です。「零雪者 安播尔勿落（ふるゆきは あはになふりそ）」、降る雪はたくさん降ってくれるな、「吉隠之 猪養乃岡之寒有卷尔（よなばりの むかひのをかの さむくあらまくに）」、吉隠の猪養の丘は寒いことであろうと、こういう思いやりの歌です。

これは巻二の相聞のところをご覧ください。相聞の原万葉、増補の冒頭です。113までを私は原万葉としましたが114の歌は「但馬皇女、高市皇子の宮にありしとき、穂積皇子を思ひて作りませる歌」です。但馬皇女という人は、先ほど死んだときに悼んでいるのは穂積皇子です。高市皇子の奥さんだったわけです。穂積皇子が横恋慕したというか、但馬皇女も夢中になっているわけです。その歌が115、116と続いてきます。穂積皇子が志賀の山寺、崇福寺にやられたときに、追いかけていきたいという歌が但馬皇女の歌です。但馬皇女は高市宮にいらっしやるとき、密かに穂積皇子に会って朝川を渡るという歌を詠んでおります。「人事乎 繁美許知痛美 己世尔 未渡 朝川渡（ひとごとを しげみこちたみ おのがよに いまだわたらぬあさかはわたる）」という歌です。これらがちょうど増補部の冒頭に並んでいるのですね。

ということはこれらはもともと資料は同じ、このところだけは非常に物語的でしょう。前後

の歌と比べても物語적입니다。物語的な長い題詞を伴っている点が共通して、同じ資料から相聞と挽歌に分けて増補したことを物語っております。

続く 204 から 206 というのは、弓削皇子が亡くなったときの置始東人の挽歌です。弓削皇子の歌は相聞増補部の他では巻三、八にしか出てきません。やはり拾遺歌群にしか出てこない。東人はこの他では巻一増補部にしか出てきません。こういうわけで統一が取れます。ここに登場してくる人物は 9 人中、この置始東人という人を除いて 8 人までがやはり一致しています。

この作品よりあとは人麻呂の私的挽歌が続きます。「石見の国から妻に別れて上り来る時の歌」というものに続きまして、その末尾は、相聞増補部の末尾に出てくる依羅娘子、これが挽歌の末尾にも出てまいります。人麻呂の歌というのは公的なものだけが原万葉に採られまして、私的な作品はのちに金村や赤人たちが増補したものと思われまます。そしてその最後は寧楽宮の標題で和銅四年の河邊宮人の歌、それからさらに志貴皇子が亡くなったときの歌というように並んでいきます。

この寧楽宮の標題は巻一にも出てきたのですが、今は時間の都合で省きます。ここでは 201 の歌以前における増補歌、および追補歌を指摘しておこうと思います。数が多いので初めに番号を提示します。まず、146 番です。『万葉集』をあとからご覧いただければよろしいのですが、141 から 145 までが有間皇子関係の歌になっています。挽歌部冒頭の有間皇子自傷歌、それから長忌寸意吉麻呂の歌、山上憶良の結び松の歌、141～145 が並んで、そのあとに「右の件りの歌どもは柩を引くときの歌にあらずといへども」と出てきます。この左注がありまして、146 番に「大宝元年」と題詞があって載っているわけです。これは左注よりあとで入れた歌であるということはいうまでもありません。これはのちの増補と考えられます。

それから 148 番、これは題詞に「一書に曰く」とあります。天智天皇が危篤のときの大後の歌、一書の歌です。これも一連のなかでここだけ天智天皇のことを「近江天皇」と書いてありまして、一書からのちに増補した歌だということがわかります。160 番、161 番歌も一書からの増補です。

162 番歌は、天武天皇が崩御したあと 8 年 9 月に持統天皇がつくった歌なので、年代的に言えば次の藤原宮に入るべき歌なのですが、天皇関係歌として前に配列しています。題詞の下注に「古歌集中に出づ」とあり、「古歌集」から後に増補したものであるということがわかります。

170 番歌は或本歌ですから追補の欄に入っています。挽歌の追補歌はすべて或本歌です。大伴歌群です。こうした或本歌は全部で 8 首です。相聞の場合少し付け足しますと、89、90、134、138、139、これらが或本歌です。101、102、126～129、これらが大伴関係歌ということになります。これを言い忘れました。だいたい或本歌が追補歌に入っていると理解してよろしいかと思ひます。

194 と 195、これは題詞を見ると非常に異様なのです。「柿本朝臣人麻呂、泊瀬部皇女と忍坂部皇子に献れる歌一首 并せて反歌」とあります。こういう題詞は珍しいですね。左注によっ

てこれは泊瀬部皇女の夫である河島皇子の亡くなったときの歌だとわかりますが、内容が非常に私的で他の殯宮挽歌とは類を異にします。もう一つ、「献〇〇歌」、「泊瀬部皇女と忍坂部皇子に献れる歌」とあるのは、実は人麻呂歌集に非常に多いのです。これは歌集から切り出してきて年代に合わせてここに入れたと思われます。人麻呂歌集から増補したのは先ほどありましたね。挽歌の146番です。146が人麻呂歌集から増補したものです。

最後は難しいですが、196から198は明日香皇女挽歌です。皇女の亡くなったのは700年(文武4)です。ところが『万葉集』はそれより4年前に亡くなった高市皇子挽歌をその後ろに並べています。この乱れは、私の解釈によればこういうふうにあります。高市皇子が亡くなったということは一つの時代が終わったことを意味します。高市皇子が亡くなった翌年に持統上皇は文武天皇を立てます。軽皇子です。人麻呂が歌った安騎野の歌の軽皇子を天皇に立てる。15歳の天皇です。このように一時代の終焉を告げるのが高市皇子挽歌です。私は一時代の終焉を象徴する高市皇子挽歌を押さえとして、そこで終わっていた原万葉の形を崩さずに保存するために、年代が前後するのも顧みずに明日香皇女挽歌を前に入れたと思うわけです。

あるいは原万葉の段階で、編者は高市皇子挽歌で閉じる意図をもってわざと入れたとも考えられますが、やはり年代順を重んじている点から見て、これは増補者がこういう順序にしたのだらうと思います。明日香皇女挽歌というのは、日並皇子、高市皇子、両殯宮の挽歌に比べて非常にプライベートなところがあります。原万葉の段階では採られていなかったと考えられます。

ところが私と全然考え方は違うのですが、古屋彰という方がおられまして、これについてこのようにいっております。日並皇子挽歌、これは草壁です。草壁皇子挽歌のおしまいにも、それから高市皇子挽歌のおしまいにもいわゆる検注というのが付いています。高市の場合は202番の左注です。「日本紀ヲ案ズルニ云ク、十年丙申秋七月辛丑朔庚戌。後ノ皇子尊薨ゼリ」、高市皇子が亡くなったというふうにいっているわけです。こういう検注が付いているのに明日香皇女挽歌にはそれがない。ということでこういっております。「しかし、人麻呂作の公式挽歌を中心に日本紀が検注された時点で、明日香皇女挽歌が採録されてこの位置を得ていた、あるいはこの位置を得たのであれば、その旨の何らかの注記がされてしかるべきように思われる。それがないのは、一連の人麻呂作挽歌とは編纂の時期を異にし、あとに補入されたとするほうが見やすいのではなかろうか」と、古屋彰さんという方が非常に細かく『万葉集の表記と文字』という本で述べております。

ここで追補歌は、先ほど申しました或本歌、大伴歌群で、これは現在の巻一、巻二のいちばん最終的にできたところだらうと思います。

このようにして原万葉の姿を私なりに復元しましたのがプリントで配ったものです。ご覧ください。1枚目に「泊瀬朝倉宮治天下」と書きました。「治天下」は万葉では「御宇」とあります。これは「あめのしたしろしめす」と読みまして、大宝令施行以後に使われた記し方です。大宝令施行というのは702年です。702年以降に書かれたもので、それ以前は「治天下」とあ

る。そういう説に従って天皇の題は全部「治天下」に統一しました。

それから、巻二にある天皇の歌はみんな「御歌」になっておりますけれども、元は「御製歌」でした。これは例えば1枚目の左側の2番目、「天皇賜鏡王女御歌」も「天皇賜鏡王女御製歌」と直しました。もう一つは2枚目の7行目で、「天皇賜藤原夫人御製歌」とあります。またもう一つは、いちばん最後から三つ目に「石上大夫從駕作歌」とあります。石上は現在の万葉では石上大臣ですが、大臣になりましたのはこのあとで、この作品をつくった持統6年にはまだ大臣ではなかったのでこれを「大夫」としました。このように直しています。

では、原万葉はいつ、誰の手によってつくられたのかといえば、その末尾が人麻呂の公的挽歌によって閉じられていることからいたしますと、この資料をご覧くださいといちばん最後が高市皇子挽歌で、その前が軽皇子、文武天皇です。文武天皇のまだ幼いとき、持統6年でしょうが安騎野に行ったときのものです。末尾がこのように閉じられていることからすると、その中心に人麻呂がいたことは容易に想像できます。人麻呂と持統天皇との密接な関係からすると、持統天皇の発意による編纂と考えることができます。

持統天皇は702年(大宝2)に崩御いたします。孫の文武天皇に位を譲ったのは持統11年、高市皇子が亡くなった翌年です。その頃を一つの機として捉えて、宮廷の威容を示す歌を編纂して内外に公布しておこうとすると共に、若い文武天皇の地位を側面から不動にする意図や、若い天皇の和歌教育も兼ねようとして編纂を企画したのではないかと考えられます。人麻呂はおそらく持統天皇の意志を汲みながら新時代のあけぼのを告げるこの軽皇子の安騎野の歌を詠んだ。「東野炎立所見而(ひむかしののにかぎろひのたつみえて)」は決して景色だけの歌ではありませんね。「かぎろひ」にのちの文武天皇を暗示しているわけです。「月西渡(つきかたぶきぬ)」は日並皇子が亡くなったこと、お父さんが亡くなったことをいっております。安騎野の歌を終わり近くにもってきて、最後を高市皇子挽歌で締め括るということを考えさせるわけです。

万葉の和歌史は、人麻呂の退場とほぼ時を同じくして持統上皇が亡くなります。人麻呂の時代のわかる歌は大宝元年の歌、先ほど出た146番歌です。増補にした歌です。翌年に持統上皇が亡くなります。伝統的な国風を重んずる、いわば保守的な気風が廃れてまいります。ようやく沈滞していきます。これが再び脚光を浴びるのは約二十数年後になります。それは、文武の遺児聖武天皇の即位をひかえ、天武天皇の皇孫長屋王が政権を掌握した時代でもあります。聖武天皇は、父文武の夭折ののち、持統天皇の妹で、祖母に当たる元明天皇と文武の姉、すなわち伯母に当たる元正天皇との二人の女帝に守られ、天武天皇の再来を期待され、約束されて育った天皇であります。長屋王は持統朝の重鎮で、人麻呂が万葉最大の挽歌を捧げた高市皇子の長男で、天武・持統朝の皇親政治の復活を図った人です。また天武天皇の皇子である知太政官事、これは左大臣と並ぶ皇親の政治職です。これは舍人皇子です。それから知五衛及授刀舍人事、要するに宮廷の禁衛軍を支配する皇子は、新田部皇子です。この2人の長老も人麻呂から若い頃歌をもらった人、歌をたてまつられた人たちです。こういう宮廷首脳部の構造、これこそが

和歌を再び蘇らせまして、歌人としては金村・赤人の時代が訪れるということです。

おそらく長屋王主導の下で、人麻呂を慕う彼らが原万葉を継いで歌集編纂を企てたとしても当然のことにように思われます。それが原万葉を増補して新たな巻々をつくろうと、歌を集めた理由だと思います。しかし長屋王時代というのは非常に短く、神亀元年から左大臣になって神亀6年、天平元年ですが藤原氏の策謀にあって自尽させられてしまうわけです。長屋王という人は王ですけれども、長屋王の遺跡からは「長屋親王」と記された木簡が出てきています。それほど権力のあった人だと思えます。

したがって、この長屋王主導の下に金村・赤人たちが集めた資料は、まず原万葉の増補ということだけに終わってしまって、あとは三、四、六、八とに、作者のわかる歌が残されていて、それがのちに大伴氏に入っていくというふうに思います。巻二の終わりに「志貴皇子挽歌」を補入しておりますのは、これもおそらく金村だと思います。霊亀元年、元明天皇が上皇として亡くなる年です。これも彼らから見ると旧時代の終わりを飾る歌として「志貴皇子挽歌」を最後に飾っているのだと思われるわけです。

彼らの集めた歌、拾遺歌群・金村歌群を集めると、だいたい作者のわかるものだけでも、巻一、二を合わせると355首です。その歌は次の大伴家持を中心とする人々によって編纂されていくことになります。巻三、四、六、八のいちばんの末尾、増補された歌を除くと、これがまた家持でほとんど終わっています。坂上郎女が二カ所出てきますが、ほとんどの部立が家持で終わっています。原万葉が人麻呂で終わり、増補歌群が金村・赤人、長屋王で終わり、そしてさらにそのあとが家持で終わるといふ、こういう関係になると思います。

何だか数字ばかりを並べておまして見づらかったと思います。先ほどの資料に「原万葉の配列」と書いたところは推定でして、まだいろいろ考慮の余地もあろうと思いますが、だいたい輪郭だけでもこのようになるということをお話し申し上げて終わりにしたいと思います。少し時間が過ぎましたが、ご静聴どうもありがとうございました。

- 坂本 橋本先生、どうもありがとうございました。人麻呂、家持、赤人、さまざまな歌人について大変幅広い見地からのお話をいただいたと思います。どうもありがとうございました。これで本日の講演会を終了いたします。